

地方と文芸

中国人は普段地方主義を抱いている。これは自明の事実である。最近浙江一師の毒飯事件が起こってから、新聞にも死者の同郷会が特に碑や祠などの建立を要求したことが載ったのも、まさにその好例である。いまこのような時勢のもとに、また地方主義の文芸を提唱するのは、どうも心眼が狭過ぎるようで、決してわたしの本意ではない。わたしが言いたいのは、ただごく平凡な話で、地方と文芸の関係をざっと話そうとするに過ぎない。

風土と住民には密接な関係があることは、誰でも知っている。だから各国の文学にはそれぞれ特色がある。たとい一国のうちでも地域によって違う風格が顕れる。例えばフランスの南方“プロヴァンス”の文人の作品は、北フランスとは違う。中国のような広大な国土では当然もっとそうである。これはもともと奇とするには足りず、しかもとてもよい事でもある。われわれはよくよい文学は普遍的でなければならないと言う。だがこの普遍なるものはただ最大の範囲に過ぎない、ちょうど算数の最大公倍数のように。この範囲内なら、どんなに多くの変化でも許容でき、決して不可分の単独数のように融通の利かないものではない。ここ何年か中国の新興文芸はだんだんと発展して、各種の創作もみな相当の成績を上げているが、われわれはまだ少しもの足りなく思う。なぜか？これはあまりに抽象化し過ぎ、普遍的な一つの要求に固執して、予定された概念を書こうと努力するために、却って真実に強烈に自己の個性を表出することがない、その結果は当然のこと単調である。われわれの希望はつまりこうした自ら加えた鎖からの脱却であり、自由にその土から成長した個性を発表することである。

いまはまだ浙江について述べよう。浙江の風土は連接する省とはなんの大差もないように見え、学問芸術の成績の上でも似たり寄ったりのようだが、仔細に見ると自ずと特性がある。近三百年の文芸界には、二つの潮流があることがわかる。他所にもあるけれども、要するに浙江が最も顕著であり、われわれはそれをしばらく飄逸と深刻と称することにする。第一種は名士の清談のようで、莊重と諧謔が混じり合い、あるいは清麗、あるいは幽玄、あるいは奔放であるが、必ずしも妙理を含んで自ら喜ばしいと思っている訳ではない。第二種は老吏の断獄のように、文筆は辛辣で、その特色は詞華にはなく、その着眼の透徹と措辞の犀利さにある。明末にはこうした情況はとても顕著になる。古文家からすれば、この頃の文風はまさに不振であったけれども、われわれはこれは文学の進化上とても重要な時期であったと思う。なぜならそれらの文人たちは多くが無意識に現代語という方向に向かって進んだのだから、ただ不幸にも清代の古学の潮流に圧倒されてしまった。浙江の文人は少し早いものでは徐文長、そのあとには王季重、張宗子がおりにずれも飄逸一派の詩文を書いた人物で、王・張の短文は語録の流れを承け、学術から文芸に転じ、もし間断されなかったならば、近体散文の始まりを形成できたであろう。毛西河の批評はまさしく深刻一派の代表である。清朝の西冷五布衣は明らかに飄逸の一派で、袁子才の名声はさらに全国的であり、彼と正反対のものには章実斎がいる。『婦学』を読めば彼ら両方の特徴がはっきりする。近代の李蓴客と趙益甫の抗争もまさに同一の関係である。愈曲園と章太炎先生とは師弟であって、対立する時の人ではないけれども、やはりこの二つの違う傾向を代表するに足る。

われわれは文学史の厳密な研究はしていない、ただ適当にいささか事実を上げて例としたまでである。たいていは何とか派の道学者や古文家ではなく、やや因習の束縛が少なく、多少ともその個性を保全できていて、その著作には自然とそうした特色が表われている。道学者と古文家の規律は、普遍的な思想と文章を作り出せる、しかし普遍の中にさらに別の変化はない、だから芸術的価値はないのである。この事は、実にわれわれに一つの教訓を与えるに足る。なぜなら現在の思想・文芸界にもまさに一種普遍的な約束があって、一定の新しい人生観と文体でも、もし因襲のままゆくなら、たちまち新道学と新古文の流派になってしまい、そこで思想と文芸の停滞が始まるだろう。われわれが希望するのは、一切の束縛を脱して、感情のままに歌い、人の文章がどんなに荘厳で、思想がどんなに楽観的で、どんなに愛国報恩を説いていようが、こちらは風流軽妙、あるいは風刺譴責の文章を作るのも、こちらの自由で、しかも説くのが隠逸であろうが反抗であろうが、遺伝と環境が融合してできたわたしの真の心拍でありさえすれば、先入主的に主張・派閥などの意見に執着して、わざと作り上げるのでなければ、やはりいずれも発表の権利と価値がある。このような作品は、自然とそれが具うべき特性、つまり国民性、地方性と個性、すなわちその生命を具えている。

われわれは浙江の文芸はどうあるべきかを主張することはできない。だがそれが一種独自の性質を具えるべきだとは言える。われわれが地方と言うのは、決して籍貫を原則としない、ただ風土の影響を言うのであって、個性を培養する土の力を重んずるのである。ニーチェは『ツアラトストラ』で、“わたしは君たちに懇願する、わたしの兄弟たちよ、地に忠実であれ”と言う。わたしの言うところもつまりこの“地に忠実”という意味である。なぜならどんな言い方であれ、人は要するに“地の子”であって、地を離れては生きてはいけない。だから地に忠実であることは人生の正当な道と言えるのだ。いまの人は空よりも高い生活を喜びすぎる。美麗にして空虚な理論の中に生活することを、ちょうど以前は道学と古文の中にあつたように。これは極めて残念なことだ。地面に跳びおり、土の氣息泥の味をその脈拍に通し、言葉に表現する。それでこそ真実の思想と文芸である。これは地方生活を描写する“郷土芸術”に限らない。一切の文芸が全てそうなのである。わたしの言うところは伝統主義に近い、つまり中国人が最も喜ぶ国粹主義だと疑う人がいるかもしれない。それに答えよう、決してそうではないと。わたしは確信しているが、いわゆる国粹は二つの部分に分けられる、生きた部分はわれわれの血脈に混在する、これは趣味の遺伝で、自分にはその去留を決める力はない。当然われわれの一切の言行に表われ、人がそれを保存するのを待たなくてよい。死んだ部分とはすなわち過去の道德・習俗で、現在にふさわしくなく、保存の必要はなく、またもうこれ以上保存することはできない。だから国粹を主張するのはただくだらない無駄話をするにすぎず、一顧の価値もない。近来浙江もすこぶる新文学に尽力しているが、いささか人が言うから我も言うの気味がある。今後は精進して、国粹・郷風という先入観から跳び出し、真実にその特性を発揮して、新しい国民文学の一部分をなすことができるよう希望する。一九二三年三月二十二日（杭州『之江日報』10周年記念のために作る）。

※初出：『之江日報』